

創世記の記録

第1部 創世記の紹介

I / はじめの書

著 / ヘンリーモリス

訳 / 宇佐神 正海

— 1976年版 —

推薦のことば

創世記の注解書は、今日二十冊以上出版されていますが、この本の必要性は他に類を見ないものです。わかっている範囲でも、この本は創造論に立つ科学者によって書かれた唯一の創世記全体の注解書です。万物の始まりの書を理解し深く掘り下げるためには、科学者であると同時に聖書的、神学的に鋭敏な著者が必要なことは明らかです。

実際、キリスト者の働き人で創世記に関する注解書で蔵書に加えたい注解書をと願っておられる方がいるなら、この本をまず加えるとよいでしょう。たいいての読者は注解書をただ調べるためだけに用いることが多いのですが、この書は、人をもっと味わって読みたいと思うようにさせるものです。節ごとの解説は批評的に取り扱うというよりはむしろ物語風に書いています。しかし、「この物語の中には重要な歴史的、科学的問題の検討が織り込まれています。したがって、節の細かい批評は困難です。モリス博士は、最初の十一章はそれに続く三十九章と同様に本当の歴史であるとの確信を持って書いています。この結論は、ただ単に信仰に基づいているだけでなく、創世記の記録を多年にわたって研究し、多くの創造論者と進化論者の両方の科学者との情報交換による科学的成果に基づいているのです。彼と多くの協力者が、地球と宇宙は数十億年というよりはむしろ若い年代であると認めて以

来、彼は創世記を説明するに当たり、ぎっしり詰まった年代順配列を支持しています。全世界に及んだノアの洪水を取り扱うに当たり、著者は水力学者としての長年の研究を用いています。モリス博士が正規の神学教育を受けていないことは聖書的・神学的意義を効果的に取り扱うことの妨げにはなっていません。博士が幅広く読書に親しみ、聖書を深く研究している証拠があります。彼は三十年以上にわたり定期的に成人クラスと大学の聖書研究講座で教えてきました。読者は、人の性格に対する並外れた洞察力をもって創世記の記録をクリスチャン生活に適應して説明している多くの所を見いだすでしょう。

もし聖書の全体を理解しようとする人がいるなら、創世記を徹底的に理解しておくことが必要です。この本で読者はこれら重要な地球、歴史の流れを通して有能な案内者のもとに導かれるのです。

アーノルド・D・エーレート

前書き 『創世記の記録』 日本語版に寄せて

私は長年に渡る日本での創造論者の働き、特に宇佐神正海博士の働きは承知しております。偉大な国日本での忠実なクリスチャンとしての創造論者の証しに感心しています。また、日本での創造科学研究の働きを力づけてきた在日アメリカ人クリスチャンのご奉仕に感謝しております。特に、カール

トン・エルキンズ氏とナタニエル・エルキンズ氏の働きに感謝しています。エルキンズ父子は長い間、日本に住み、主に仕えている方たちです。

それゆえに、私の著書『The Genesis Record（邦題『創世記の記録』）の十章までの翻訳と出版の大役を負ってくださったことを知り、心から喜びました。この前書きを書くようにとの御依頼を受け心からその榮譽を感謝しております。

聖書の根本をなす書としての創世記は今までに書かれた本の中で、おそらく最も重要なものであると心から信じております。聖書の六十六巻のすべてはキリスト教の信仰告白の土台であるばかりではなく、全歴史の土台でもあるのです。創世記は、世界の初め・生命の起源・人間や社会制度（家庭、政府、農業など）の起源の真の記述で、進化論や汎神論が説く起源の説明とは全く異なったものです。私たちは皆、アダムとエバの子孫ですから、最初の男女の生活や人間関係は今日の私たち自身の生活に重要な示唆を提示してくれます。

私を書いた本の中で、『創世記の記録』の出版は特に楽しいものでした。それで、日本語版で入手可能となることは実に喜ばしいことです。このすべての企画に携わったすべての方に心から感謝するとともに、神がこの日本語版を用いて日本のすばらしい友達に働き、教訓と祝福を与えてくださることを信じつつ心から祈ります。

ヘンリー・M・モリス 創造研究所

あかしと紹介

私は、今から五十年前、子どもの時、このすばらしい創世記を初めて読みました。母が聖書をプレゼントしてくれたので、何も知らないまま、一ページ目から読み始めました。創造、墮落、大洪水と離散という大きな課題、引き込まれるようなアブラハムと他の族長たちの物語、すべては小さな少年の心に深い影響を与えました。

私は、聖書は神のことばであると小さい時から教えられて育ちました。そして、少年時代には、これらの物語に少しの疑いも抱きませんでした。しかしながら、何年もたって、中学校、高等学校時代の教会学校と教会でのなまぬるい教えと、ライス大学での進化論講義とが合さって多くの疑問がわいてきました。その結果、私はまもなく現在有神進化論と呼ばれているものを信じるようになったのです。大いなる創造とノアの大洪水の物語はもはやそのまま受け入れられなくなり、そして族長たちの話は、隠された真実に多くの伝説的脚色がつけられたものとなったのです。こうして私は、大学生時代には聖書を読むのを事実上止めてしまいました。しかし、教会へは規則的に通っていました。

私は小さな少年の時、すなわち小学校に入る前にイエス・キリストを救い主として受け入れていました。そして、キリストは小さいものの滅びるのをお許しにならなかったのです（ヨハ一〇・二七）

三〇、マタ一八・一〇（一四）。大学を卒業してから、ギデオン協会に入会し、福音的教会に出席し始めました。そこで、第二次世界大戦中に編集された科学的説教集であるアービン・ムーアンの説教を聞き、特に聖書をもう一度読み始めました。そして、結局、神のことばに対する全的確信へと立ち返ったのでした。

後で、ライス大学で教えるためにヒューストンに帰って、キリストが彼ら学生にも必要であることを大学生に証しする機会が与えられました。彼らは知的学生で、その多くは科学または工学専攻の学生でした。私がかつて悩んだことのある同じ問題（思いもよらない問題もありましたが）が、彼らがイエスを信じ受け入れる妨げになっているのを見いだしました。これらの問題の中心的なもの、聖書、特に創世記が信頼できるかということでした。もし創世記が歴史的に信頼に値しないなら、キリストの証しも含めて、後の聖書の記事もすべて信じることはできないはずだというものでした。

こういうわけで、私は創世記の科学上のまた歴史上の正確さを研究し始めました。この研究がそれからの三十年以上にわたり私の関心の的となりました。こうして創造と初期の歴史に関する疑問を吟味する多くの機会へと道が開かれただけでなく、人を取り扱う神のすばらしい多くの方法、特に、キリストを通しての救いの備えを知ることができました。聖書は生き生きとした興奮を覚える書で、神は実に時機を得た助けとなったのです。神が創世記で計画し、約束し、準備したことを、神はキリストの来臨で実際に完成されたのです。そして、このことは今日神のことばを信じて受け入れる人々の生涯に当てはめられ成就しているのです。

その当時から何年にもわたって創世記を教える機会が私にしばしば与えられました。全部で八回だったと思います。回を重ねるごとによりわくわく、よりよく人々に教えることができるようになりました。創世記は単なる神話とか伝説ではなかったのです。それは、歴史の始まりに当たって実際に起こった出来事と実在した人々の真の記録です。また、創世記は単につまらない科学的または神学的論文ではありません。この地上を闊歩した最も偉大で最も魅力的な何人かの男女の親しい日記です。さらに、創世記の科学と神学に関する内容は非常に重要で文字通り真実です。

『創世記の記録』というこの本を書き下す基となった私の研究が、私にとって創世記が現実味を帯びたスリルに富むものとなったように、他の人々にとってもそのようなものになることをただ願っています。主の再臨に際し、私の生涯にとって祝福となったノア、アブラハム、ヤコブ、リベカやその他偉大な男性や女性と実際に会える日が来るのを待ち望んでいます。

この注解書とその基本的姿勢について二、三述べさせていただきます。文のスタイルは批評的で分析的取り扱いというよりはむしろ叙事的な取り扱いをしています。それは創世記の物語が真実で歴史的事であることを人々が感じ取ることが非常に大切だからです。また、同時に、実に重要な疑問や問題も取り扱っています。特に、創世記と通常関連している科学上の疑問は徹底的に吟味し、創世記の記録が文字通りに正しいとする立場を支持する解決に達し得たと信じています。検討は、個々の節というよりいくつかの節を合せ区切りとしてまとめて吟味していますが、私は個々の節で特に目立つ題材すべてを吟味し説明するように試みました。

欽定訳聖書の創世記はやさしい参照を挿入しています。この注解書で必要な所では適当なくつかの異なる注解を簡単に述べておきました。

アーノルド・D・エーレート氏に原稿の推敲と推薦のことは書いていただきました。心から感謝しています。エーレート博士は、多くの書に造詣が深く素晴らしい個人的な友人です。彼は素晴らしい経歴をもっています。ダラス神学校、フラー神学校、タルボット神学校で図書館の館長として勤めあげた人です。今はクリスチャン・ヘリティジ・カレッジで図書館館長として働いています。彼は神学博士号をダラス神学校で受け、福音陣営で神学問題の記録者として有能な働き人です。こういうわけで、彼が、この『創世記の記録』の推薦のことは書いてくれたことをとても名誉なことと感謝しています。

私に最初の聖書を与えてくれた母に感謝しなければなりません。彼女は今七十七歳（一九七六年現在）です。今も私の本の原稿をタイプしてくれています。『創世記の記録』は、おそらく彼女がタイプした本のうちで最も長いものですが、この他に少なくとも十冊はタイプしてくれました。それゆえ、特別な感謝をこの愛の労苦を惜しまなかった母に贈ります。

この本は、最初はクリスチャン・ヘリティジ・カレッジで創世記の私の授業のための概要という形で書いたものです。学生からのいろいろな示唆と貢献は大変役に立ちました。カリフォルニア州リッチモンドの教師マーサ・ヘラー嬢は原稿を編集してくれました。創世記の最初の十一章に関する私の以前の研究からいくつかの資料を採用して挿入しています。もちろん、多くの他の注解書も『創世記の記録』を書くに当たり役立っています。特に触れなくてはならないのは、古典的な二巻からなるルポールドの注解書で、他のどれよりも直接役に立ちました。

私の長男ヘンリー・モリス三世は、全原稿の校閲と、二つの索引の準備をしてくれて大変助かりました。彼はこの本の出版に当たり直接助けてくれた息子ですが、六人の子どもたち全員が、この本を完成するのに何年もの間絶えず力づけてくれました。ちょうど、神のことが、少年であった私にとつてすばらしい祝福であったように、子どもたちは皆一人一人子ども時代にイエス・キリストと聖書を知り愛する者となりました。今は皆成人し、両親を尊敬し、互い脚に愛し合い、主の働きを通して活発に証しをしています。もちろん、人間的に言うくと、これは、ひとえに、教育にあたり忠実に愛を保ち続けた彼らの母であり私の愛する妻のおかげです。それゆえに、私は、『創世記の記録』を私の愛する妻メアリー・ルイズと六人の息子、娘たちに贈ります。

私は個人的に『創世記の記録』を完成する働きを長年にわたる他のどの本の制作よりも楽しんできました。私の祈りは、神がこの本を効果的に用いて私たちの信仰を強め、感謝に満たされるようにして下さることであり、多くの人が創世記に書かれている神のすばらしい働きを信じて理解するようになることです。

一九七六年三月

サンデイエゴ

ヘンリー・M・モリス

第1部 創世記の紹介

I はじめの書

歴史の土台／だれが創世記を書いたか／解釈の原則／永遠への期待

第2部 創造主が造られた世界

II 世界の創造（一章一～二節）

基礎の基礎／最初の節／創造の日時／間隙説／第二節

III 創造の六日間（一章三節～二章三節）

日Ⅱ時代説／住むべき幕屋／生きている初造物／完成された創造のみわざ

IV 人の創造（二章）

エデンの地理学／道徳的選択／人と動物／彼の肉の肉

V 人類の墮落（三章）

あの古いヘビ／人の犯した最初の罪／滅びの束縛／失樂園Ⅱ失われたパラダイス

VI 失われた世界（四章～五章）

義人アベルの血／カインの道／約束のすえの系列／エノクの驚くべき事件

VII ノアの時代（六章）

神の子たち／暴虐で満ちた地／ノアの箱舟／神の備えとノアの従順

VIII 大洪水（七章～八章）

古い世界の最後の時／満ちあふれた水／洪水の後／新世界

IX 新しい世界（九章）

人間政府の樹立／虹の契約／ノアの息子たち／ノアの預言

X 神と諸民族（一〇～十一章）

諸民族の系図／ペレグの時代／バベルの塔／テラの系図

後書き

第1部 創世記の紹介

I はじめの書

歴史の土台

創世記は、今まで書かれた書物の中で最も大切な書物です。聖書が神の靈感によって書かれたことを信じていない人でも、聖書ほど歴史に影響を及ぼした書物はないことを、誰も否定できません。しかも、聖書は、実に多くの部分から構成されており、創世記は、それらすべての部分の基礎になっているのです。もし現代の多くの人々の好みに合わせて、聖書から創世記を故意に削除してしまうなら、聖書の残りの部分は理解できないものとなります。それはちょうど一階のないビルや橋げたのない橋のようなものです。旧約聖書は、イスラエル民族に対する神のお取り扱いを述べています。もし、創世記のはじめの数章に書かれている通りに、全人類に対して繰り返し広げられる神の目的を考慮しなければ、旧約聖書は、実に頑迷で偏狭なものとなってしま

まいます。新約聖書は、人類の贖いに対する神のご計画の実行とその手段について記しています。人の歴史の最初に起こった出来事の記録は創世記にしか記されていません。これに基づいて人間の救いの必要性に照らして考えなければ、新約聖書は、余計で時代錯誤のものになってしまいます。

創世記は、それがなければ人類には永遠に到達できない情報を与えてくれます。その情報とは万物の起源に関する情報、すなわち、万物の意味に関する非常に重要な情報です。未来は過去と密接に結びついています。自分の起源に関する信念は、必然的に、その人の人生の目的と運命に関する信条を決めることでしょう。人が動物に由来し、そこから自然に生じたという自然主義的、動物主義的な考えをもつならば、その人は自分の将来に対しても自然主義的、動物主義的な計画しかもてなくなります。一方人類は、全能で聖く、愛に満ちた神の御手によって造られたと考える人は、当然、歴史に対する神の目的が必ず達成されると予言します。ですから、創世記を信じて理解することは、神と、人間に対する神の意図を理解する上で欠かすことのできないものです。

日本語では創世記と訳されていますが、その英語名である Genesis (ジエネシス) ということばの意味は「起源」ということです。創世記は、天体、地球とその上にある生命など万物の起源を説明しているただ一つの真実で信頼できる書物です。万物の起源のこまかい説明は、いろいろな哲学者（しばしば科学者と自称する人々）によって提供されてきました。私はこの本において万物は自然に生じたという自然発生説（進化論も含む）の起源論と創世記の記事を対比させながら、それぞれ適切ところで吟味することにします。起源に関する情報を提供している創世記は必要不可欠なものであることをここに強調しておきます。次の項目に注意してください。

一、宇宙の起源

創世記だけが、この宇宙を構成している基本的な時間と空間と物質の連続体としての実際の創造を説明しています。一章一節は、あらゆる文献、科学、哲学を調べても、全く独特のもので、古代の宗教にのっとった神話にある宇宙発生説、または現代科学で仮定している宇宙発生説でも、その他どんな宇宙発生説でも、何らかの形で存在していた永久不変の物質やエネルギーから始まって、他の物体が何らかの過程をへて徐々に導き出されたと考えているのです。

創世記だけが、物質、空間、時間の究極的起源について独特の説明を与えているので、特殊創造と言われています。

二、秩序と複雑さの起源

人類の普遍の見解は、個人的な経験からも、物理学や生物学の体系のような正規の研究を通してでも、秩序を持った複雑な物は自然に崩壊して、秩序のより低い単純な状態になる傾向があるということを知っています。秩序と複雑さは、決して自然に生ずるのではなく、秩序を生み出すようにあらかじめ計画された結果として生ずるのです。最初の計画者とその計画にのっとった目的は、創世記にだけ見いだされます。

三、太陽系の起源

地球、太陽、月、そして惑星やすべての天体は、創世記にある通り、創造者によって存在するようにされたのです。現代の宇宙発生論者たちが、宇宙と太陽系が自然に生じたとする学説をなんとか作り上げて説明しようとしています、あまりうまく行きません。これは当然です。

四、大気圏と水圏の起源

地球には、他の惑星とは違って、大量の液体の水と、表面を薄く覆っている酸素と窒素の混合気体があります。両者とも、生命には不可欠のものです、これらのものは他の惑星では決して発生しませんでした。これらの存在は特殊創造によってだけ説明できるのです。

五、生命の起源

生物がどのようにして生命のない化学物質から生じたかは、唯物論哲学者にとって全くのなぞであり、永遠になぞでありつづけるでしょう。動植物の生殖過程や、遺伝子系に組み込まれたほとんど無限といってよい複雑さは、熱力学や確率の法則が正しい以上、特殊創造でなければ説明できません。

創世記にある「生物の創造」は、唯一の合理的説明です。

六、人間の起源

人間は宇宙の中で、最も高度に組み立てられた複雑な存在です。人間は数え切れないほど入り組んだ物理化学的構造と、生きてゆき、そして殖えてゆく驚くべき能力を持っているだけでなく、美、愛、崇拜といった抽象的な事柄について考え、それらの意味を思索する能力を持っています。動物の祖先から進化した子孫が人であると想像するのは全くの空想にすぎません。人間の本当の起源についての記録は創世記にしかありません。

七、結婚の起源

人が結婚し家庭を持つ極めて普遍的で安定した習慣、すなわち、一夫一婦制で男性家長制の社会文化も、創造主によって定められたと創世記にあります。一夫多妻、幼児殺害、女性家長制、乱交、離婚、墮胎、同性愛やその他すべての好ましくない習慣は、後に出現したものです。

八、悪の起源

因果律に立つなら、善・真理・美・愛などの件は創造主ご自身の根本的属性に起源していると説明できません。宇宙にある肉体的悪や道徳的悪は、神がお造りになった完全無欠な世界に人間の自由意志と責任に対する譲歩として、また、創造主であると同時に贖い主としてご自身を現わすために、神の許しのもとに一時的に割り込んだものであると説明されるのです。

九、言語の起源

動物の鳴き声と人間の知性を用いた抽象的、象徴的な伝達方法との間には、大きな隔たりがあつて、どんな進化論の説明によっても橋渡しは全くできません。特に、創世記は言語の起源を説明しているばかりでなく、民族ごとに異なる言語がある理由を説明しています。

一〇、政治の起源

人類の組織化された政治体系は、自分自身の行動のためばかりでなく、法と刑罰という制度によって、秩序ある社会構造を維持するために、責任を負う人々によって発展させられたことが創世記に記されています。

一一、文化の起源

創世記は、都市化、冶金術、音楽、農業、牧畜、文学、教育、航海術、機織り、窯業などの文明あるいは文化に関係ある主なものの始まりをも記しています。

一二、民族の起源

今日、学者はみな、人類は本質的に一つの種であると認めています。もともとすべての人間が一族一言語だったならば、どのようにしていろいろな人種や民族が生じてきたのか、ということが問題なのです。創世記だけが適切な答を与えてくれます。

一三、宗教の起源

世界にはいろいろな宗教があります。そして、それに向かってすべての人間が努力すべき究極的な真理と意味があるはずだという良心があり、多くの宗教は、礼拝と行為の面で組織化された体系をとっています。人間の良心というこの独特の性質の起源と、真の神に対する真の礼拝の起源が創世記に示されています。

一四、選民の起源

イスラエル民族のなぞは、彼らが独特の民族で、一九〇〇年間も自分たちの故国を持たず、世界に聖書と真の神についての知識を与え、それによってキリスト教がもたらされたのに、その実、彼らはまだキリスト教を拒んでいることです。彼らは、世界の美術、音楽、科学、経済やその他人間の文化的遺産に際だった貢献をしてきたにもかかわらず、多くの人々から軽蔑されています。このような理由も、創世記に述べられているイスラエルの独特の起源によって理解できます。

このように創世記は、実際に、すべての真の科学、真の哲学の土台であるばかりでなく、真の歴史の土台です。そして、何よりも聖書に書かれている神の啓示の土台です。創世記ほどしばしば、しかも、聖書の他の多くの書に引用されている書はありません。

例えば、旧約聖書では、アダムの名は、申命記、ヨブ記、歴代誌第一に、ノアの名は、歴代誌第一、イザヤ書、エゼキエル書に出てきます。アブラハムの名は、旧約聖書三十九巻のうち十五の書に、新約聖書二十七巻のうち十一の書に出ています。ヤコブの名は、旧約聖書の創世記を除くと、旧約聖書の二十の書と、新約聖書では少なくとも十七の書に出ています。特別な意味でイスラエル人やイスラエル民族に言及しているところでは、それぞれ創世記の基本的な権威をはっきり認めています。なぜなら、イスラエルはヤコブに与えられた新しい名で、彼の息子たちがイスラエルの十二の部族になったからです。創世記を離れては、イスラエルの存在も、旧約聖書の残りすべての書の存在も説明できなくなってしまう。

どちらかと言えば、新約聖書の方が旧約聖書よりも創世記に依存しているようです。少なくとも創世記の一六五箇所が、新約聖書に直接引用されるか、またははっきり言及されています。そのうちの多くは二回以

上引用されているので、創世記から新約聖書への引用や言及は少なくとも二百箇所以上あります。

創世記の中で、懐疑主義者や未信者から最も厳しく攻撃されたのは、初めの一章から十一章までですが、この部分が新約聖書に最も大きな影響を与えていることは重要です。しかも、新約聖書には、創世記一章から十一章までの引用や直接の言及が百箇所以上もあります。さらに、新約聖書の記者はみな、各々の書の中で、創世記一章から十一章までの記事に言及しているのです。少なくとも六つの異なる機会に、イエス・キリストご自身も、これらの章、特にはじめの一章から七章までの各章に書かれている、だれかしら、また何かしらの記事を引用したりそれについて言及したりしています。

さらに、これら旧約聖書や新約聖書に引用されたり触れられている箇所のどこでも、これらの記者が創世記に記されている出来事や人物を、単なる神話や比喩として考えていたことを示唆する例は一つもありません。かえって、彼らは、創世記を完全に歴史的で真実の権威あるものとみなしていたのです。

ですから、実際に、聖書全体の権威を拒否することなく、創世記の歴史性とそこにある神の権威を否定することはできません。創世記を拒否することは聖書全体を拒否することになります。もし、最初のアダムが比喩に過ぎないなら、第二のアダムも比喩に過ぎないのは当然の論理です。もし、人間が創造されたままの罪のない状態にとどまり、実際に罪に陥らなかつたならば人間に救い主が必要な理由はありません。もし、万物が進化という自然の作用によって説明できるなら、万物の未来における超自然的な完成を期待する理由はないのです。もし、創世記が偽りならば、預言者や使徒たちが創世記は真実だと言った信仰告白も偽りです。イエス・キリストご自身も、詐欺師であつたか、またはご自身があざむかれていたかのどちらかで、いつわりの証人となり、ご自身の全知全能に関する証言は冒瀆になってしまいます。人間の永遠の救いのためのキ

リストの福音に対する信仰も、全く空しい笑い草になってしまうのです。

ですから、是が非でも、創世記の記事が神話や比喩に過ぎないとするどんな働きにも対抗しなければなりません。創世記はありのままの歴史として書かれたものであり、万物の起源について神の靈感によって書かれた説明です。ですから、誰でも万物の起源を創世記にある通りに受け入れて理解しなければ、何事に関しても完全な理解に至ることは期待できないのです。

だれが創世記を書いたか

創世記は、他のすべての正典と同じく、聖霊による靈感を受けて書かれたものです。「なぜなら、預言は決して人間の意志によつてもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語つただからです」(Ⅱペテロ・二・二一)。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」(Ⅱテモ三・一六)。

しかし、正確なところ、創世記の驚くべきことばを書いた、聖霊に動かされた人とはだれだったのでしょう。この問題の答えは、大別して三通りになります。

一、モーセ以後のいろいろな著者説

大部分のいわゆる自由主義に立つ神学者、注解者、そして、かなりの保守主義者と称する神学者は、イスラエルの歴史上でヒゼキヤ王からエズラまでの時代に、知られていない多数の筆記者や編集者がいたと考えられています。彼らの名を知ることができませんが、彼らは、イスラエル人の祖先ばかりでなく、エジプト人、バビロニア人、その他の人々によって逐語的に言い継がれてきた古い聖徒伝や伝説を、繋ぎ合わせて編集したのが創世記だということです。さらに、これらの記事に偉大な律法制定者モーセの權威を帯びさせるために、この編集者たちはモーセから伝わったものであると触れ回ったということです。これを「文書仮説」と言い、創世記ばかりでなく、モーセの五書の他の四書とヨシヤ記にも当てはめています。また、旧約聖書の他の大部分の書にも、少しは適用させており、これは、「JEDP仮説」とも呼ばれています。これらの頭文字は、それぞれの部分を書いたと思われる著者を表わしています。「エホバ記者 (Jehovist)」は、神の名をエホバと呼ぶ人々によって、紀元前八五〇年頃に記されたとしています。「エロヒム記者 (Elohist)」は、紀元前七五〇年頃に、神の名をエロヒムとして用いる人々たちによって記され、「申命記記者 (Deuteronomist)」は、前の二つをさらに編集、修正したもので、紀元前六二〇年頃に書かれ、申命記の大部分を含んでいるとされています。そして、「祭司 (Priestly) の文書」は、紀元前五〇〇年前後にユダヤ人祭司のグループによって編集、修正されたものであると考えているのです。

この奇妙な考えを支持している人々は、文書編集の研究に際して、このつぎはぎの考えの根拠になりそうな言語や文体の特徴、あるいは習慣や文化についての言及や間接的な証拠に基づいて、自説を正当化しようとしてきました。しかし、彼らがそのようにした本当の理由は、彼らが人類の発生に関して進化の考えを

基本的に受け入れていたことによるのです。このような学者は「高等批評家」と呼ばれています。人々は、すべての古い写本から聖書の原文をできるだけ正確に決定しようとしている「本文批評家」と呼ばれる学者と彼らを区別するために、高等批評家という呼び方を選んだのです。かつて彼ら「高等批評家」は、創世記にあるような文化を持つように人類が進歩したのはモーセよりずっと後の時代で、モーセの時代には文字が知られていなかったため、モーセは創世記のどの部分も、また、五書の残りのどの部分も書けたはずがないと固く信じていました。

高等批評家たちは、創世記の一部分、特に初めの一章までの記事は、古代バビロニアの神話に由来するものだと主張してきました。しかし、考古学上の発掘の結果、このような進化論的前提は完全に間違っており、その大部分は全く否定されたのです。モーセの時代のはるか以前に、文字を書くことがさまざまな形で広く行きわたっていたことは、全く疑う余地のない事実として知られており、このことは進化論に立つ人類学者たちでさえ認めています。この分野の指導者の一人であるラルフ・リントンは次のように言っています。

文字を書くことは、五千年から六千年前にエジプト、メソポタミア、インダス川流域で、ほとんど同時に発生した。もちろん、モーセの時代はわずか三千五百年くらい前です。この引用のように、考古学者たちは、少なくともアブラハム以後の創世記に記されている文化の兆しは、当時の目撃者の記録から十分に有り得る内容であることを今は認めています。例えば、今世紀の著名なパレスチナ考古学者として広く認められているネルソン・グリユック博士は、次のように述べています。

実際に、聖書の記述が考古学上の発見によって否定されたことが未だにないことは明らかだ、と言ってよいであろう。聖書にある明瞭な輪郭や、正確で詳細な歴史的記述を裏づける考古学上の発見は、数多くな

れてきた。

この論文で、グリユック博士は、モーセより何百年も前に当たる、アブラハムについてのおよその時間や場所に関する考古学上の発見を特に述べています。同様に、多くの著名な聖書学者は言語学的研究により、創世記の言語がモーセの時代よりもずっと後のものだという高等批評家の主張を裏つけるものは、何も無いことを繰り返し示して来ました。

確かに、この文書仮説が出て来た背景は、自由主義的な学者たちが進化論が正しいとの偏見を持っていたため、彼らは、一神教と高度な文化とがモーセの時代に広く行きわたっていたことを認めたがらないのです。高等批評は、ある特殊なものに対して喚起された批判的能力の適用に過ぎなかった。そして、この批判的能力の達成により、大胆な結論を出すように勇気づけられた。もし、生物学者、地質学者、天文学者、人類学者が関与していなければ、保守主義者の中に、高等批評家は存在しなかったか、いたとしてもきわめて少数派であった、と断言してよいと私は考えている。

この本は、進化論とその科学上の誤りについて詳細な検討をするにはふさわしくありませんが、近年になって、進化論の科学的証拠は創造論に立つ科学者によって誤りであることが徹底的に証明された、と言ってよいのです。今日、私たちは創造科学を支持する多くの素晴らしい文献を手に入れることができます。そして、高等批評に立つ学説を裏づける進化論的論拠には全く基礎がないのです。

したがって、創世記の著者についての JEDP などの文書仮説は、この注解書で擁護されているような見解ではありません。文書仮説を用いるのが適切と思われるところには、時に、参考のために引用するかも知れませんが、この書の目的は、本文批評についても高等批評についても詳しく述べることはありません。

創世記は、年代と著者について正しい確かな理由があり、何世紀の間、ほとんど初めのまま完全に受け継がれてきた、と考えられます。

二、著者はモーセ

過去において保守的な学者の大多数が、創世記はモーセが書いた、という見解を受け入れてきたと考えられます。これは、ユダヤ人の記者とクリスチャンの先祖たちの一致した伝統的見解でした。創世記は、五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)の中で最初のもと考えられていて、これらを合わせてモーセの律法(ヘブル語トーラ)と呼びます。この一般的な見方を、キリストご自身も取っておられたようです。「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事からを彼らに説き明かされた。……わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした」(ルカ二四・二七、四四)。

私たちが手にしているような創世記の記事をモーセが書いたと仮定すると、どのようにしてモーセがそれを受け取って伝えたのか、という問題が出てきます。これには三つの可能性があります。(A)モーセは、神からの直接啓示により創世記を受け取った。すなわち、人の聞き取れることばによって神が述べられ、それをモーセが記述したか、もしくは、神が過去の重大な出来事を幻としてモーセに見せ、無意識のうちに聖霊に導かれながら、モーセが自分のことばでそれを書いた。(B)何世紀の間、親から子へと伝わってきた言

い伝えのすべてを受け取ったモーセは、それらを集めて聖霊の導きで書きつづった。(C) 過去に実際に書かれた記録を受け取り、モーセがそれらを集め、聖霊の導きで最終的な形に結び合わせた。

これらのどの説明も、言語靈感の教えと、モーセが著者であるという立場に十分に合わせる事ができません。しかし、前二者(A・B)の考えを裏づける所は、聖書の正典のどこにもありません。「主の幻と啓示」は、ダニエル書、エゼキエル書、ヨハネの黙示録などのような未来の預言や啓示と、普通は関係しています。靈感による直接口述法は、十戒やレビ記などのように、主に特別の律法や法令の公布のために用いられました。しかし、創世記は完全に歴史上の出来事の物語的記録の形をとっています。聖書で、創世記と類似する点が列王記、歴代誌、使徒の働きなどに見いだされます。これらすべての記録で、記者が過去の文書を、例えば、列王記第一・第二、歴代誌第一・第二のように集めて編集したか、そうでなければ、自分で見たこと、他の証人によって確かめられたことを、ルカの福音書、使徒の働きなどのように記録したかのどちらかです。

創世記は、新約聖書に少なくとも二百回も引用されたり言及されたりしているにもかかわらず、これらの引用の中に、真の著者はモーセであるとは一回も書かれていないことは大切です。さらに重要なことは、モーセの名が新約聖書に少なくとも八十回は出ていて、そのうちの約二十五回は、五書の中の創世記以外の部分を彼が書いたと言っていることです。

この証拠は、モーセが、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を実際に書き、創世記については、主として題材を集めるために働いたという説明を支持していますが、決定的なものではありません。これは、決して聖霊の働きを軽視するものではありません。聖霊は、後に列王記や歴代誌を編集した名の知られていない編集者を導かれたのと同じように、創世記の編集の時にも、モーセを誤りなく導かれたのです。しかし、

創世記を今の形にまとめた人がモーセなのですから、創世記もモーセの著書の一つに含めるのはふさわしいことです。実際、この説明によって、書かれているすべての出来事を直接の証人の証言と認める事ができるので、創世記に記されている出来事の真実性はさらに確かなものとなります。

三、族長たちが残した記録を編集

以上のことから、この注解書は、創世記に挙げられている族長の系図のとおり、父から子へと手渡されてきた過去の記録を、モーセが集めて編集したという立場を示唆しています。すなわち、アダム、ノア、セム、テラなどの族長たちが、各自の生涯で起こった出来事や、何らかの方法で得た正確な知識に関して、各々が書き下ろしたのです。これらの記録は、石の平板などに記され、モーセの所有になるまで保存されたことでしょう。彼は、聖霊に導かれながら、それらの中から自分の目的に合う適切なものを選び取りました。そして、自分で、編集者としての説明的解説と段落をつけ加え、ついに、現在、創世記として知られている形に編集したので。

もともとの文書は「これは……の歴史である」という鍵のことで判断することができるとしよう。この「歴史」という語は、ヘブル語のトーレードスの訳語で、もともとは「起源」、広義では「起源の記録」を意味します。創世記には、これらの句で分けられた部分が十一か所あります。

(1) 「これは天と地が創造されたときの経緯である」(二・四)。

(2) 「これは、アダムの歴史の記録である」(五・一)。

- (3) 「これはノアの歴史である」(六・九)。
- (4) 「これはノアの息子、セム、ハム、ヤペテの歴史である」(一〇・一)。
- (5) 「これはセムの歴史である」(一一・一〇)。
- (6) 「これはテラの歴史である」(一二・二七)。
- (7) 「これは……イシュマエルの歴史である」(二五・一二)。
- (8) 「これはアブラハムの子イサクの歴史である」(二五・一九)。
- (9) 「これはエサウ、すなわちエドムの歴史である」(三六・一)。
- (10) 「これがセイルの山地にいたエドム人の先祖エサウの系図である」(三六・九)。
- (11) 「これはヤコブの歴史である」(三七・二)。

これらのトリードース（歴史、系図、経緯）の区切りが、創世記に収集される基になった文書を表わすと仮定しても、なお、これらの特別な名が、後につくものか前につくものか、あるいはどちらの場合もあると考えるべきなのか、という問題が残ります。それらは、次に続く資料の見出しなのでしょうか。それとも、先に述べたことの結びなのでしょう。

それぞれのトリードースにつけられた名は、後につくもの、すなわち結びであることを示す証拠が多いように思われます。それぞれの区分で記録された出来事はすべて、名が挙げられている個人の死後ではなく、生前に起こったことであつたので、いずれの場合にも、彼らがこの資料を入手することができたのです。この見方での最大の難点は、この決まりで区分した場合、イシュマエルとエサウとが書いたとされる多くの部分、彼らが書いたとするにはふさわしくないとと思われる点です。しかし、「イシュマエルの歴史」の問題は、

イサクが保管し伝えた、より幅広い記録中の小区分であつて、そこに最終的にイサクによって書き写されたと仮定すれば解決できます。同様に「エサウの歴史」も、ヤコブが、あとで「ヤコブの歴史」と見出しをつけて伝えた、彼自身の記事に組み込んで枠を広げたのかも知れません。

もし、この説明が正しければ、創世記は以下のように、九つの主な小区分に分けられます。

① 天と地が形成されたときの経緯 (一・一～二・四)

はじめの創造と六日間のわざを述べたこの部分は、人の名は何も付されていません。なぜなら、その時に起こった出来事を記録する人は、明らかに一人もいなかったのですから、人の名が付けられていないのは当然です。この部分は、神ご自身が直接書かれて、アダムに手渡されたか、そうでなければ、啓示によってアダムに示されてアダムがそれを書いたかのどちらかに違いありません。

② アダムの歴史の本 (二・四後半～五・一前半)

この区分は、アダムによって書かれたもので、エデンの園、誘惑と墮落、カインとアベルの体験などが述べられています。明らかに、アダムこそがこの部分の歴史を記録した人として最もふさわしいのです。「本(Book)」という語が使われているので、これらの初期の記録は、実際に書き下ろされたものであつて、ただの口伝によつたものでないことが明らかになります。新約聖書の最初の節のマタイの福音書一章一節「イエス・キリストの系図 (the book of the generation of Jesus Christ)」を考慮することも大切です。

③ 「ノアの歴史」(五・一後半～六・九)

族長ノアは、大洪水が実際にやってくる前のある時点で、彼以前の族長たち、すなわち、大洪水前の族長

たちの記録を編集しました。創世記五章に挙げられている系図によれば、ノアの父レメクは、アダムを初めとして系図にある族長たちと同時代に生きていたこととなります。ノア自身も、アダム、セツ、エノク以外にはみな知っていたことでしょう。ノアはさらに、自分で見たこと、つまり当時の人々の急速な墮落と、彼らを全滅させる神のご決定を記録しました。更に、神がノア自身をあわれんでくださったことを、つけ加えています。

④ 「ノアの息子たちの歴史」(六・一〇～一〇・二前半)

セム、ハム、ヤペテは、大洪水の準備と大洪水そのものについて記録する責任を授かったと思われる。彼らは、ノアの彼らに対する預言、さらに、ノアの死と大洪水直後の出来事も記録しました。

⑤ 「セムの歴史」(一〇・二後半～一一・二前半)

ノアの死とバベルの離散の後、ノアの三人の息子たちは別れ別れになり、セムが記録を保管する責任を負ったようです。したがって、セムはバベルでの言語の混乱と、その結果家族が離散したことを書きました。また彼は、離散の時点までのノアの子孫の名を、創世記一〇章にある、いわゆる諸民族の表の中にだいたい記録しました。セムは、大洪水後五百年生きましたが、離散後のハムやヤペテの子孫たちの系図は、はっきりわからなくなっていました。

⑥ 「テラの歴史」(一一・二後半～一二・二前半)

これは非常に短い文章ですが、セムからテラとその三人の息子たちまでのセム族の系図だけが書かれています。しかし、これは非常に大切で、その中大洪水からアブラハムまでの年代を知る唯一の手掛かりがあります。

⑦ 「イサクの歴史」(一二・二後半～二五・一九前半)

前者の⑥と比べて、これは大変長い文章で、アブラハムが神の召しを受けた時から死ぬまでの詳しい生涯の歴史と、父が死ぬまでにイサクの生涯に起こった出来事を教えてくれます。イサクは、自分の記録に異母兄弟の子孫の記録「イシュマエルの歴史」(二五・一二)を付け加えたようです。イサクは、イシュマエルが、父の葬儀のために家に戻った時に彼から異母兄弟の記録を手に入れたに違いありません(二五・九)。イサクは、アブラハムの埋葬から約四十八年後に、イシュマエルが死んだことも述べています。

⑧ 「ヤコブの歴史」(二五・一九～三七・二前半)

ヤコブの記録は、イサクの記録と同じように、創世記の他の大部分よりもさらに長く、その中には、彼の父イサクの晩年の出来事が記されていて、ついでラバンによる二十年間の逗留期間に彼自身に起こったすべての出来事、カナンへの帰郷、妻ラケルと父イサクの死の記録もすべて収められています。イサクがイシュマエルの子孫の記録を自分のものに付け加えたように、ヤコブも、兄エサウが父と一緒に葬るために来た時に(三五・二九)手に入れた一つの文章も付け加えました(三六章)。特に三六章三一～三九節の、エドムの地で治めた王の八代にわたる歴史は、後でモーセが編集の際に挿入した可能性も考えられます。

⑨ 「ヤコブの息子たちの歴史」(三七・二後半～出・一)

ここでは、これまでのような型にはまった書き方は用いられていませんが、出エジプト記一章一節の語法は、他のものとよく似ています。「さて、ヤコブといっしょに……エジプトへ行ったイスラエルの子たちの名は次のとおりである。」創世記に記されているようにヨセブとその兄弟たちの生涯の出来事は、もともと、彼らしか知らなかったはずで、父祖たちがしたように、彼らがそれを書いたのか、口伝によったのかわかり

ませんが、これらの物語は創世記の最後の節から出エジプト記の最初の節へと自然につながっていることから、最終的にはモーセの手に入ったに違いありません。決まり文句は正確に繰り返し返されているはずで、事実、もし、出エジプト記一章一節の「名」ということばを「歴史」(トーレードス)という語に置き換えるなら、出エジプト記一章一節は、「さて、これがイスラエルの子たちの歴史である」と読むことができます。

創世記はおそらく、その中に記された出来事を実際に目撃した人たちによって書かれたと思われる。最初の物語は、昔、広く行なわれていたように、石や粘土の板に記録され、父から子へと手渡され、ついにモーセの所有となったことでしょう。モーセは、編集のために適切な部分を選び、編集上必要な付け足しや解釈を加え、一つの文書から次の文書へと無理なくつながるように調整し、最終的に、今日、私たちが手にしているような創世記に仕上げました。

創世記の著者についてのこの説を、はつきり証明することはできませんが、他のどんな説よりも、手に入るすべての事実によく適合するように思われます。この説は、聖書の記録が正確かつ忠実であるだけでなく、聖書の靈感と権威の教義にもよく合います。その上、このアプローチは、記事に対する生き生きとした洞察、さらに、他のどの説よりも新鮮で適切な活力に満ちた認識を与えてくれます。

解釈の原則

創世記の注解を書いた人々の多くは、特に、創世記一章から十一章までの意味を比喩的にとらえるべきだと力説してきました。自由主義者、あるいは新正統主義的な解説者は、これらの記録の歴史性をも否定しま

すが、「神学的」価値を霊的な解釈によって残そうとします。例えば、アダムを實在の人物とは考えないで、むしろ、すべての人の象徴的描写とみなすのです。アダムとエバの罪は、人類の最初の男女であるアダムとエバによって実際に起こった不従順の行為によるものではなく、すべての人が同じように経験することを象徴的に描写したものだということです。

しかし、真摯に聖書を学ぼうとする人は、このような比喩的解釈を拒否するに違いありません。すでに述べたように、新約聖書の著者たちやイエス・キリストご自身は、創世記の記録を文字通りに起こった歴史として受け取っています。この重要なことに関して、現代の「学者」が、キリストや使徒たちに誤りがあると考え、その誤りを正そうと企てるのは無礼で傲慢なことです。創世記には、ヨセブが解釈した夢の他には比喩などありません。これらの夢で象徴的に示されたことは、現に起こる出来事を表わしていました。そして、ヨセブが解釈した通りに、やがて歴史上正確に起こったのでした。

ガラテヤ人への手紙四章二四節には、「このことには比喩があります」と、ハガルとサラのことに言及していますが、これは創世記が比喩であることを示していると思う人もいるかも知れませんが、これほど間違った解釈はないでしょう。使徒パウロは、神がすべての人を扱われる永遠の原理を説明するために、神がアブラハムや妻や息子を扱われた時の霊的原理を用いただけなのです。彼は、比喩的な適用をしたのであって、比喩的な解釈をしたものではありません。文脈から明らかにわかるように、アブラハムとイサク、サラとハガルは、パウロにとって實在の人物でした。創世記で述べられている出来事は、實在の人物に対して実際に起こったことであり、この事実があつてこそ、パウロは、人類全体に対しての神のご計画を語るこれらの出来事の霊的な意味に関する結論を導き出すことができたのです。

その他の注解者の多くは、創世記の歴史性を否定しませんが、これらの出来事が持つ現実的意義よりも、これらの出来事は象徴的に解釈すべきだと力説しています。ノア、アブラハム、ヨセフや他の人々の性格や体験は、キリストの生涯、イスラエルの人々、教会で経験すること、またはある重大なことの「象徴」だと取っています。このような注解昔は、しばしば非常に敬虔で霊的な説明をし、確かに創世記の歴史性と聖書の逐語靈感を信じています。それにもかかわらず、彼らはしばしば極端な予表論的解釈（予表論・新約聖書に書かれてある出来事は旧約聖書に予表されているという説）にふけり、実際に書かれてあることをはるかに越えてしまう傾向があります。このような解釈が本当に正当かどうかは大問題です。

もちろん、創世記のある部分が新約聖書で象徴として扱われているのは確かです。最初のアダムは、第二のアダムに対応する象徴として受け取られています（ロマ五・一二～一九、一コリ一五・二一、二二、四五～四七）。妻は教会の象徴として書かれています（エペ五・二九～三三）。アブラハムとイサクは、父なる神がひとり子をささげることの象徴だと述べられています（ヘブ一・一七～一九）。おそらく、他の象徴論的解釈も、新約聖書ではつきり説明されていなくても正しい場合もあるでしょう。ヨセフの体験はこの例だと思われる。それは、キリストの体験に細部に至るまで似ているので、単なる偶然の一致ではとても説明できません。しかし、おろそかにしてはいけません。それは新約聖書の著者自身が、自分の教義の一部に適用している場合を除いて、象徴は実例または適用としてのみ考えるべきで、教義的解釈に当てはめて考えるべきではないということです。もう一つおろそかにしてはならないことは、象徴論的適応にどんな価値があるかと、まず、用いられた出来事の歴史的真実性にかかっているということです。

以上の理由で、この注解書では、まず、この世の一般に対する神の目的によって、実際に起こった出来事を提示することとその歴史的意義に強調点を置き、全時代を通してすべての場所で神が個人を取り扱われる原理は何かという点から取り扱っています。象徴論的な説明も適切などころでは提示していますが、それを第一に強調することはありません。特に、人間の起源と初期の歴史の最もはじめの記録が、真実の生活記録であり有意義なものであることを強調したいのです。

永遠への期待

創世記は、人間の起源の歴史としてだけでなく、人間の未来に関する預言としても重要です。黙示録は、創世記と同じように字義通りに受け取るべきです。創世記ではパラダイスが失われ、黙示録ではパラダイスが取り戻されるのです。

創世記のはじめの二章には、人間のために造られ、人間の支配下に置かれた完全な世界について述べられています。もし、人が罪を犯さなかったならば、その完全な世界を人間の幸福と神の栄光のために支配し、発展し続けたはずです。しばしの間、罪と呪いとが侵入しても、神はご自分の目的をくじかれるようなお方ではないので、はじめに意図されたすべてのことを、ついには成就すると確信できるのです。ゆえに、地球をはじめの完全な状態に回復され、罪と呪いは取り除かれ、もはや死もなくなり、永遠に続くものとされます。ですから、創世記の人物や出来事を、黙示録や多少は他の未来に関する預言と比べてみるのも役に立ちます。黙示録の研究で、原初の世界をよく知ることができ、創世記の研究で終末の世界をよく知ることができます。なぜなら、実際には、二つは本質的に同じだからです。

もちろん、それらの世界は全く同じというわけではありません。その世界の人アダムはまだ試みを受けていなかったのです。というのは、はじめの世界は、目的こそ完全に欠けのないものでしたが、試みの世界としてふさわしい、いくらか試験的なものでした。終わりの世界では、人間はすでに罪と墮落とを経験していますが、贖いと新生も体験しているのです。人間は完全に永遠のものとされ、世界もまた完全で不変のものとされ、もはや試みの可能性もなく、人間の永遠の住まいとして理想的で十分な世界、創造主であり救い主である神がご臨在する世界となります。はじめの世界と終わりの世界についての以下の比較に注目してください。

□ 試みの世界 (創世記)

- 光と闇との区別 (一・四)
- 地と海との区別 (一・一〇)
- 太陽と月との支配 (一・一六)
- 設けられた園にいる人 (二・八、九)
- エデンから出ている川 (二・一〇)
- 地に有る金 (二・一二)
- 園の中央にあるいのちの木 (二・九)
- ブドラクとしまめのう (二・一二)
- 園を歩き回られる神 (三・八)
- 夜がない (二一・二五)
- もはや海はない (二一・一)
- 太陽も月もいらぬ (二一・二三)
- 設けられた都にいる人 (二一・二)
- 神の御座から出ている川 (二一・一)
- 都にある金 (二一・二)
- 都にあるいのちの木 (二一・二)
- あらゆる宝石 (二一・二九)
- 彼らとともに住まわれる神 (二一・三)

他にも似たような、役に立つ比較がたくさん可能です。それぞれの世界について研究すれば、はじめの世

界の特質は、人間が罪に陥る可能性を持っているか持っていないかを試すのにふさわしい特質をもっていたことがわかります。一方、それに対し、永遠の世界は、永遠に贖われた状態にある人のために計画されたものとしてふさわしい特質をもっています。おそらく、もっといちじるしい対比は、神の呪いの下にある世界と新しい永遠の世界の特質に関しての言及でしょう。

□ 呪われた世界 (創世記)

- 呪われた地 (三・一七)
- 日々の悲しみ (三・一七)
- いばらとあざみ (三・一八)
- 額に汗を流す (三・一九)
- 野の草を食べる (三・一八)
- ちりに帰る (三・一九)
- いつも悪いことに傾く (六・五)
- 皮の衣 (三・二一)
- サタンの敵意 (三・一五)
- いのちの木から遠ざけられる (三・二四)
- エデンの園から追放 (三・二三)
- 約束された贖い主 (三・一五)

□ 永遠の世界 (黙示録)

- もはや呪いはない (二二・三)
- もはや悲しみはない (二二・四)
- もはや痛みはない (二二・四)
- 涙は拭かれる (二二・四)
- 十二種の実がなる (二二・二)
- もはや死はない (二二・四)
- 汚れたものはない (二二・二七)
- 真白なきよい麻布の衣 (一九・二四)
- サタンは火と硫黄の池に投げ込まれた (二〇・一〇)
- いのちの木の実を食べる権威を得る (二二・一四)
- 都に自由に入る (二二・一四)
- 完成された贖い (五・九、一〇)

他にも多くの似た対比に注意を向けることができます。創世記と黙示録の間に直接の関連がどんなに多くあるかがわかります。創世記で言及されている多くの人物が、黙示録に再び登場します。ノアの契約と関連して出て来た虹（創九・一六）が、力ある天使（おそらくキリストご自身）の頭上の虹（黙一〇・一）として見られます。

黙示録一三章四節の獣は、実は墓から出て来たニムロデであると示唆する人がいますが、それは疑わしいでしょう。しかし、ニムロデの態度や悪行の多くは、終わりの日の大いなる反キリストの人格に再び現わされています。キリストによって救われた死者の住み家で、父アブラハムは監督として描かれています（ルカ一六・二三）。黙示録七章の証人は、イスラエルの十二部族各々から出た二万二千人ずつの人から成っています。そして、新しいエルサレムの十二の門にはイスラエル（ヤコブ）の十二人の息子たちの名が刻まれています。天にある贖われた者たちはモーセの歌を歌う者とみなされています（黙一五・三）。

これらと、また他の多くの部分の理由から創世記の理解は、神の永遠の目的を理解するために大変役に立ちます。